



フェイク・ラブ

著：藍澤たすく
イラスト：(じーん)改めかもめ遊羽



目の前には澄んだ瞳でじっと俺を見つめる女の子がいる。

栗色の滑らかな長い髪と、薄く紅をひいた肉感的な唇が印象的だ。

その姿は、どこぞのファッショントークを飾つてもおかしくないぐらい綺麗で、可憐だ。美少女といつていいだろう。

だが彼女は嘘だ。それは俺が一番よく知っている。なぜなら――

「うつおー、潤ちゃん化けたねー。これ、全然女子高生でい健全じゃね?」

俺の目の前の鏡に映つた美少女の正体は、クソ姉貴に女装された俺自身だからだ!

「さつけんな、クソ姉! カットモデルするだけって約束だつたろうが!」

閉店後の美容室「L」。

店内にいるのは俺と姉貴の二人だけだった。

「いーじやん、いーじやん。どーせ誰もいないんだし。同じカットするならむっさい男より可愛い女の子のほうがいいに決まつてんでしょ!」

「俺は男だ!」

姉貴は悪びれる様子もなく、俺の髪を霧吹きで湿らせ、手慣れた様子で梳き始めた。ちなみに肩まで伸びたこの長髪は嘘ではなく本物だ。

「それにしても可愛いな〜まさかここまでとはね〜。そうだ潤ちゃん、あたしとデートしよう

ぜ!

駅前のプリルラのスフレとか超うまいんだから! ね、潤子ちゃんも食べたいでしょー?」

「誰が『潤子』ちゃんだ! 一人で勝手に食つて一人で豚になれ!」

カットモデルっていうから散髪代浮くし、まあいつかぐらいいの気持ちで来たのに……大誤算だつたぜ。

それにしてもある野郎、ノリノリでメイクしてたけど、これすぐ落ちんだろうな? このままの顔で帰るのは絶対ごめんだかんな。

「あ、美樹ちゃん」

「!」

姉貴の声につられて鏡で後ろを確認すると……そこには見知らぬショートカットの、眼鏡の女の子がいた。姉貴の口調からしてしの従業員なのだろう……つていうか、他に人いたのかよ、最悪じやん! 姉貴だけでも超羞恥プレイだつてのに、なんで赤の他人にまでこんな姿を見られなきゃいけないんだよ……

つてか、もしかして今までの姉貴とのやりとり聞かれてたんじや……。

「きれい……」

美樹ちゃんと呼ばれた少女がため息混じりにそう呟いた……つていうか、きれい、つても

しかして俺のこと……ですか？

ということはまだ俺、男って気づかれてない？ 女つて思われる？？

「そうだ、美樹ちゃん！ 潤子ちゃんの髪カットしてあげてよ！」

「んあっ!!」

はじけるような笑顔でとんでもない提案をするクソ姉貴！

(ふざけんなあああああ!! 何考えてんだ、てめえええええ!!)

こつちは声を出すと男だとばれてしまうので抗議することもできない……！

視線で人が殺せるほど目ヂカラを込めて姉貴を睨みつけてやるが、まつたく効果がない。

「じゃ、あとはよろしくね、美樹ちゃん！」

「あ、はい……」

まじかよ、まじで奥に引っ込みやがったよ、あのクソ姉貴……。

「美樹ちゃん」が俺におずおずと近づいてくる。そりゃいきなり押し付けられたら迷惑だよな。

姉貴を呼ぼうにも声は出せないし……あー、どうすりやいいんだ！

「あの……どんな感じにカットなさいますか？」

「！」

眼鏡の奥から覗き込むように、背後から「美樹ちゃん」が訊いてくる。背中にふんわりと甘い良い香りが漂ってきた。

「ど、どうしよう……！」

「え？ あ、はい、このサンブルみたいな感じですね？」

俺は苦しみ紛れに手近にあつたマネキンを指さした。思いつきり女のマネキンだったが、彼女は何の疑問も持たずに納得したようだ。

てか、黙つて人をあごで使うつて超感じ悪くね？ 俺……。

ふと鏡を見るとバックヤードから顔だけ出してにやにやとこちらを見ているクソ姉貴と目があつた。

「つざけんなよ、てめえ！」

何いい顔してサムズアップしてやがんだ！ まじ殺すぞ!!

静かな店内には規則的なリズムを刻むハサミの音だけが淡々と響き続ける。

あー、もうだめだ！

緊張と恥ずかしさがごちゃまぜになつてもう爆発しそうだ！ 早くゲロして楽になりたい！

「「ごめんなさい！」」

え？

俺の声と彼女の声が重なつた？

鏡をみると、ハサミとクシを持つたまま、真っ赤な顔でもじもじする「美樹ちゃん」の姿があつた。

「あの、あたし潤くんのこと、一目見てからずつと好きで……それで翔子さんに頼んで、会わせてもらつて、でもあたし本当は男の人とか苦手だから、そうしたら翔子さんが話しやすくしてくれるつて言つて、でもそれが女装だなんて知らなくて、でもあんまり綺麗だからあたしうしていいか判らなくなつちやつて……」
沈黙。
ちんもく

「あの……潤くんは年上の彼女とか……いやですか？」

しばらくの静寂のあと、彼女は消え入りそうな声でそう言つた。

クソ姉貴。

自己チュウでわが今まで自分勝手で最悪な女だけど……今なら、スフレ1個ぐらい奢つてやらんこともないぜ。

チクショウ。

おしまい